

第三百五十三回 青葉会

平成二十七年八月二十七日(木) 午後五時半〜八時半 丸紅来客食堂(談話室)

〈顧問〉 ☆ 川合万里子 先生

〈選者〉 ◎ 川口孤舟

〈出席者〉 ◎ ☆ 今井紀久男 大林猛 小川恭延 柿崎忠彦 川口孤舟 後藤保明 中野一灯 中山芳博

山崎亜也 山内天牛

伊賀山そらお 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 豊田ゆたか 福島正明 古田昇

星田啓子 宮内規雄 渡邊盛雄

赤田堅 安部眞希子 楠田彦十 小西弘子 在間千恵 庄司龍平 高橋敏郎 橋口隆

早川允章 福島正明 星田啓子 村田くに子 山崎青史 山本三恵

〈紙上選句〉

《互選句》

☆ 高嶺より明くる安曇野そばの花 一灯 (堅・万・弘・千・敏・允・亜・青・天)

七点 一生は一幕限り蟬時雨 孤舟 (猛・千・敏・灯・允・啓・く)

六点 遺しおく表札煙る門火焚き 一灯 (眞・彦・弘・啓・亜・青)

◎ 盆迎へ系図の折目均(なら)し読む 全 (孤・弘・芳・青・天・三)

☆ 襲雨来て真夏の土の匂ひ満つ 啓子 (堅・万・保・千・敏・灯)

(☆:「来て」↓「来(らい)」(紀↓驟雨去り焦げた土の香強烈に)

五点 ☆◎ 炎天へ球児疲れを打ち返し ぞらお (猛・万・孤・龍・青)

(☆:「疲れ」は弱々しいので↓「炎天へ球児一発打ち返し」)

☆◎ 戒名に俳号いれし茄子の馬 紀久男 (眞・万・孤・彦・灯)

(☆↓「俳号を戒名に入れ茄子の馬」)

◎ 命名を書いて硯を洗ひけり 忠彦 (孤・彦・弘・く・天)

母文枝文月生れの白寿なり 堂哉 (眞・忠・彦・弘・青)

無住寺や憂さの全てを法師蟬 芳博 (堅・猛・恭・啓・亜)

鱧切りの音響かせて季の名残 啓子 (紀・龍・敏・隆・三)

「棒しばり」の勘九郎と巳之助

四点 ☆ 生き写し踊る二人の意気の好さ 紀久男 (恭・万・弘・敏)

(☆:この場合、「踊る」が季語と認められるかどうか?)

☆ 来し方に不覚いくたび天の川 孤舟 (堅・保・龍・啓)

青柿の黄ばみ初めたる大和かな 堂哉 (忠・彦・千・芳)

☆ 常念を背に仰ぎ見る稲光 亜也 (紀・万・允・三)

(☆:「見る」は余分。↓「稲妻を仰ぐや常念岳を背に」)

手火花にさすがの子らも無口なり 天牛 (猛・忠・龍・隆)

神戸から新たなジャズや夜半の秋 盛雄 (芳・正・啓・青)

叱られても孫上(うは)の空夏休 紀久男 (万・彦・天)

空蒼しついと横飛び赤とんぼ 保明 (恭・千・龍)

(蒼し↓蒼き)

三点 ☆ 立秋の空から落ちる鳥の声 全 (隆・啓・三)

切符失せし改札口の残暑哉 恵洲 (万・正・亜)

(万:上五は「切符失せ」)

☆ 葛切りや心に添ふも頼りなし 芳博 (猛・保・亜)

孫四人離郷五十年西瓜食ぶ 全 (猛・く・天)

(◎・忠↓上五は不要では?)

夏の果心に貯まりし粗大ごみ 正明 (紀・芳・隆)

湘南のわが青春や砂灼くる 昇 (允・く・亜)

◎ 打ち寄する波は海月(くらげ)の影法師 啓子 (孤・灯・芳)

(「波は」は、「波に」を誤記したもの。どちらが良いのでしょうか?)

二点

☆◎じじばばは水鉄砲の的にされ
(☆↓「ぢぢばばは水鉄砲の標的に」)

中高生前に語り部夏休み

軒下で蟬あおむけに転がれり

雑草の庭吹き抜ける処暑の風

夏雲や陽に焦がされてなほ白し

長女抱く赤子(やや)の頬いろ百日紅

☆ 出産の祝い酒買ふ星月夜

終戦に生まれて古希の敗戦忌

南溟に眠る碇や敗戦忌

初秋の朝を奏づるオルゴール

誕生も死もひとりぼち曼珠沙華

津和野秋水渠の鯉もふつくらと

◎ 一つの世も鬼は棲むのか秋暑し

母描き征きし学徒や敗戦日

人生はネバーギブアップ浮人形

ひたすらに日暮待たるる残暑かな

☆ 送り火を待たでラッシユの車中かな

柳家喜多八とその呑み仲間の会

☆ 主役より美妓のそばだつ暑氣私

(☆↓「そばだつ」よりも「際立つ」がふさわしくないか?)

夏草よ繁茂の力くれたまえ

昼日中陰をもとめて歩を急ぐ

☆ 秋の旅スチュワードスの笑み優し

(☆↓「旅の秋スチュワードスの笑み優し」)

颱風の眼に囲まれし蟄居かな

☆ 盆過ぎて気怠さ流る機中かな

(☆↓「盆過ぎの気怠さに在る機中かな」)

夏雲や鼻で女兒抱き歩む象

(タイにて)

落石の音の間遠に大雪溪

落蟬をパクリと犬やこともなし

地謡に女の声や月見草

炎帝や比叡の山も黙しをり

秋の鮎子持未だしうるかあり

☆ 爺展脚孫の土産のコガネムシ

山畑を助く電流鹿火屋守

天牛 (万・孤・龍)

全 (眞・忠・正)

全 (保・千・隆)

そらお (堅・く)

猛 (紀・恭)

忠彦 (保・灯)

全 (恭・万)

全 (紀・隆)

孤舟 (芳・天)

全 (灯・允)

全 (忠・隆)

保明 (眞・紀)

健介 (紀・孤)

一灯 (紀・敏)

昇 (恭・孤)

規雄 (允・く)

亜也 (眞・万)

紀久男 (万)

猛 (龍)

全 (保)

恭延 (万)

全 (堅)

保明 (万)

ゆたか (紀)

一灯 (青)

芳博 (紀)

啓子 (正)

全 (忠)

亜也 (三)

天牛 (万)

盛雄 (三)

●次回青葉会

九月二十四日(木) 午後六時から九時

当季雑詠五句 投句二句

十月二十二日(木)

全

丸紅(コンチエルト)

以上文責 紀久男

平成二十七年八月句会報

一 新選者の孤舟さんら10名出席。投句も10名。孤舟さんからの大吟醸「越の梅里」、忠彦さんの純米吟醸「一の蔵」亜也さんの吟醸生酒「眞澄」小生の純米吟醸（小千谷）そして保明さんの松江桂月堂の「薄小倉」を賞味し乍ら松江・津和野・大阪の生野区の想い出等を話題。いつもの猛さんの進行役でご覧のように一灯さんがダントツ。啓子さんが好成績でした。会創立30周年を祝う心算でしたが、ドタキャン多く、いまひとつ氣勢上がりませんでした。

二 関係者近詠

産土神の杉の梢へ巢立鳥	万里子	梅雨最中ドーム下に沸くプロ野球	恭延
かなかなと日がな一日谷越しに	全	夏晴れや芝生の女性像眩し	全
迅雷や四国の山に韻き合ひ	全	夏晴れや隊伍に遅るることも良し	全
母逝きし古里の空青胡桃	全	捨てるには惜しく思へり枇杷の種	忠彦
花の日や児らから花を交番へ	全	水を差す下手な掛け声夏芝居	紀久男
曾孫に和食を奢る初夏の夜	全	京劇「二人悟空真贋争」	全
外人と並び味はう新茶寿司	全	汗見せぬ殺陣の凄まじ西遊記	全
風鈴草湯煎で開けるジャムの蓋	眞希子	――「萬緑」―― 九月号	規雄
一茎に左右向く百合主の祈り	全	夏空の下なる若き命かな	全
法事にも世代交代額の花	全	――「NHK俳句」9月号	池田澄子選
一軒が朝戸開くるよ夏燕	弘子	卯建立つ宿場の空や夏燕	允章
風に聞く車夫の草笛千曲川	全	新涼やわけても匂ふ青畳	全
一八の端に傾ぎて屋敷神	全	まほろばの列島沸騰田水沸く	堂哉
蕎麦の軒旅の日傘を畳みけり	全	国境の定まらぬ日や飛魚（あご）	舞へり 盛雄
幸せを迎へに駅まで青田風	全	音聞けば戦禍を思ふ遠花火	全
この齡の羨しきものに今年竹	青史	来し方は道草ばかり翺雲	健介
草を拏（ひ）くこの情念の何処より	全	鎮魂の大火火揚ぐ空襲忌	紀久男
根無草まだ是々非々で生きてゐる	全	――「きさらぎ句会」―― 8月	全
飛魚の羽たたまれて売られけり（輪島朝市）	全		

平成二十七年九月十日

紀久男記